



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



ミサでアトラクションで 教区の一体感を味わう

第2回教区フェスタ



泉神父の司会で進められた小教区紹介

「同じぶどうの木」のテーマのもと 映像を交え全小教区を紹介

九月十三日(日)午後、鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂で第二回「教区フェスタ」が開催され、教区内にあるほぼすべての小教区から司祭と代表信徒ら二百五十人が集まりミサをささげ、その後のアトラクション、茶話会で教区の一団感を味わった。

教区フェスタは教区評議会と一年交代で開催されることになっていて、今年が二回目。今回は「同じぶどうの木」のテーマのもと、カテドラル記念ミサとアトラクション、茶話会があった。

一昨年の第一回教区フェスタのアトラクションは、代表者による信仰体験発表と教区にある活動団体グループの紹介だったが、今年「教区の一団感」を表現しようと全小教区の紹介となった。 献堂記念ミサ 現在の鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂は、ザビエル渡来四五〇年祭に合わせて一九九九年九月十五日献堂されたもので、今年はその堂から十年の節目を迎えた。午後一

時からささげられたミサを司式したのは、郡山司教を中心とする二十人の司祭団。これに教区の終身助祭の二人が奉仕した。 福音朗読後に郡山司教は、ミサの大切さを強調したうえで「要石」になろうと次のように説教した。「イエスを信じているという私たちが、信徒同士も司祭も司教もバラバラなのが現状。しかし十二使徒たちでもそのよう

であったから、イエスもこの程度だろうと思っておられる。そんな私たちでも大丈夫と言えるのはミサがあるから。回心し人々と平和のあいさつを交すミサは、まさに神の国を表している。この神の国の体験を持って私たちは派遣される。これはイエスを要石として生きていくためだ。そんな私たちはまた社会の中にあつては、要石となるよう生きなければならぬ」

その後参列者たちは、教区の一団とそこで生きる信徒、司祭、修道者がそれぞれ立場で精一杯働けるよう熱心な祈りをささげた。 小教区紹介

カテドラル主聖堂の壁に映像を映し、泉浩二神父(加世田教会主任)の司会で進められた。映像は各小教区から集められたもので、教会の建物、主任司祭の顔、そして信者たちの輝く笑顔が編集されていた。その映像を前に、小教区の代表者が精一杯自分たちの小教区をアピールした。教会の歴史から現在の活動の様子まで、丹念に準備された原稿は時には笑いをそして時

には他の小教区の見本となる活動の紹介などで、鹿兒島県の特徴からなかなか交流することのできない地区との距離を縮める有意義な試みとなった。 小教区の紹介の後には、今鹿兒島で大きく成長しつつあるフィリピン人のコミュニティも元氣よく登場した。すべての紹介が終わると今回の試みを祝福するように聖堂内は大きな拍手で包まれた。

司祭年の取り組みを検討

九月の定例司祭集会

定例司祭集会が九月八日(火)教区本部で開かれ、長崎教会管区や教区における「司祭年」への取り組みについて話し合われた。 郡山司教からの報告という形で紹介された長崎教会管区での取り組みは、叙階三年未満の司祭に「実習体験コース」、ベテラン司祭に「生涯プログラム」を準備し、司祭の資質の向上を目的とするもの。 一方、鹿兒島教区では司祭を支えるために「司祭のための祈り」を全信徒に配布し、教区挙げて司祭のた

めに祈りをささげることや司祭自身の取り組みとして次の四点について取り組みを申し合わせた。 ①教皇ベネディクト十六世からの司祭宛のメッセージを再読し、互いに分かち合う機会を設ける。 ②信徒からのニーズを読み取り、その対応について検討する。 ③「司祭大会」を利用し、司祭としてのあり方を深める。 ④聖ピアンネの霊性や生涯について学習する。

新風

洗礼を受けて、神の家族の一員に加えてもらった私たちは、お父さんに神を、お母さんに聖母を、兄弟にイエスをいただきたい

神の家族として成長する

家族の交わりの中で、私たちは人間的に成長していきます。赤ちゃんが最初から完璧でないように、洗礼を受けた人も徐々に成長していきます。それは年齢に関係ありません。もし洗礼を受けたまま、神の家族のきずなが壊れたり、切れたりして

いると人間としての成長は望めません。しかし回心の恵みによって新たに信者としての生活を再スタートすることができ、教会を外から見ている人の中には「信者の中には罪

はあり得ます。お互いに好き嫌いがあからずく。それはどこの世界にもあることなので気にすることはありません。ただ大事なことはミサの初めに悔い改めの心で「回心の祈り」をすることです。「全能の神と兄弟の皆さんに告白します

「私の話、ちゃんと聞いてる?」「あ、ごめん」「今のあやまり方には心がこもってない」「そう言われても...」「恥づかしながら、こんな静けさが頻発する我が家である。一日中家にいて、家事と育児に追われる家内にとって、夜は唯一の会話の時、こちらが上の空だったりすると怒り心頭...となってしまう。考えてみれば仕方のないことかもしれない。▼とは言え、こちらにだって言い訳はある。仕事から帰れば社会の動きが気になるからニュースに、そしてリフレッシュのために好きなスポーツ番組...。言い訳がましいが、男とはそんなもの。だから状況を悪化させないための手段としての「あ、ごめん」なのだ。でもそれは時として、相手の怒りを買うことになっていく。▼今朝は、息子に早い時期に洗礼をという話でもめた。未洗者の妻を持つ者にとって大きな挑戦だったのだが、妻からの「それでは私が一人取り残されてしま

YET

「洗礼を」と誘う前に、まず誘う側の心からの回心が必要とのメッセージをもらったというところで、納得でも苦手な作業に腰をあげなくてはならなくなった。

(H・N)

前今まで【①テーマの話→②分かち合い→③聖書】という流れでしたが、今回は通常のミサの流れ【③聖書→①聖書から頂いた生き方についての話→②分かち合い】に変わっています。変更の理由は後者の流れが本来のみことばの祭儀に合致しているからです。

召命の減少と司祭の高齢化から、遅かれ早かれ小教区での主日のミサが困難になることが予想されます。その時、ミサがないので集まらないのではなく、信徒がともに集い、「司祭不在時の集會司式」ができるようになることを前提として、取り組む養成の一環です。三月に一回、このパターンでも養成講座を開きたいと思っています。信徒が信仰をこのような集會で積極的に証しすることは、①初代教会の時代から「主の日」を大切に祝う伝統の中で（迫害下でも、信仰の自由がない場合でも、司祭が減少し、遠くにしかない場合でも）、「主の日」毎に集まることにより教会と繋がりに、神に感謝と賛美を捧げることが出来る、②信徒自身が頂いた信仰を深め、小教区共同体への奉仕、つながり、関係を深めていくことが出来る、③火参加者が互いに対してより深く交わり、行動的かつ責任ある典札参加が期待できる、と思えます。今回は初めての「司祭不在時の集會司式」であるため、注意すべき点を確認しながら進めていきたいと思っています。

【参考：典札省発行『司祭不在のときの主日の集會祭儀指針』一九八八年教皇認可・承認】

実施に関しては各司教区で文書化されています。（現在、仙台・浦和・京都・大阪教区で指針が発行されています）以下の文は以上の文書を参考にしています。司祭不在時の主日の集會祭儀は「ことばの祭儀」と「聖体拝領」の二部からなる式次第に従い、とりわけ、供え物の奉納と奉獻文は省かれる。信徒が集會司式を司会する場合、司祭や助祭のみに留保されている部分（挨拶、説教、派遣の祝福）はすべて省く。（読むように主任司祭から依頼された説教などは別）また、主任司祭は集會司式準備会を開き、集會司式者、先唱者、朗読者、詩編唱者、伴奏者、共同祈願代表者と当日の典札について前もって深めて

者は祭壇に礼をした後、通常の司祭席（内陣）の外に用意された別の席に着く。④主任司祭がこの共同体のために感謝の祭儀を捧げているかを知らせ、霊的にその共同体と一致するように薦める。⑤今日の集會はミサではないこと、集會祭儀であること、どの主日であるかを告げる。⑥挨拶（十字架のしるし）後、「教会の祈り」の三つの詩編唱和を唱える。⑦集會祈願を唱える。（ミサではないため式文は相応しく変えることが望ましい）

北薩宣教奉仕者 (信徒使徒職) 養成講座

金持ちが神の国に入るのは難しい

出水教会主任司祭 大松 正弘

おく。また、それぞれの役割を分担しておくことが望ましい。主任司祭から推薦を受け、他の信徒からも尊敬されている信徒に、司教が任命する役務としては、司祭奉仕者、宣教奉仕者、朗読奉仕者、聖体奉仕者があり、彼らは養成を十分に受けた後、公にカトリック教会の中でその役務を果たす。ただミサが本来の祭儀であることに変わりなく、感謝の祭儀を伴わない主日の集會を奨励したりすることのないよう留意されねばならない。

各自、福音を読み返し、味わったり、心に響いたことばを書き出す。④集會祭儀準備会の「福音の分かち合い」での気づきや信仰の喜びを準備会参加者が「証し」或いは「進めのことば」として発表する。今回は助祭候補者の石神氏がカーネギー氏やマザー・テレサの生き方を通して財産を持つことの危険性について話した。⑤主任司祭が準備した「説教」を朗読する。⑥当日の典札や福音を解説するテキストを朗読する。⑦その場で福音の分かち合いをする。（分かち合いのルー ルは前回を参照。）⑧信仰宣言、共同祈願を唱える。

開祭：①入堂の歌を歌う。②司式者の服装は司教が決めるか、典札に相応しい服装とする。③集會司式

交わりの儀：①奉仕者は

+KABAYAN SEKSIYON+
Mga May-Kabalintunaanang Katangian ng Pananampalataya

Nasubaybayan natin ang mga paksa tungkol sa ating pananampalataya. Ang karugtung nito ay ang sa letra G. *Personal Subalit Pangambayanan (Ekleksya)* Ang pang-anim na kabalintunaan ng pananampalataya ay ang pagiging *personal* nito ngunit likas na pangambayanan (eklesya). Una sa lahat, ito ang Simbahang nananalig at kaya naman nagagabayan niya at napalulusog ang ating pananampalataya. Tinanggap natin ang biyaya ng pananampalataya noong tayo'y bininyagan at tinanggap sa Kristiyanong sambayanan, ang Simbahan. Sa loob ng ating mga Kristiyanong pamilya at ating parokya, tumutubo at nagiging ganap ang pananampalatayang itanim sa Binyag. Sa pamamagitan ng katekesis, sa pamamagitan ng Sakramento ng Kumpil, sa pamamagitan ng Salita ng Diyos na ipinaliwanag at ipinangaral at lalo na sa pamamagitan ng Eukaristikong pagdiriwang ng Sakripisyon ng Pampaskuwa ni Kristo, umuunlad tayo sa pananampalataya. Maraming iba't ibang tagapagtaguyod at anyo ang pananampalatayang Kristiyanong kahit dito sa ating bansa. Ngunit isang pangunahing katangian ng Pananampalatayang *Katoliko* ang kanyang *balangkas bilang Simbahan*. Sa Matanda at Bagong Tipan, laging ipinakikilala ng Diyos ang sarili sa anyo ng isang sambayanan. Bukod dito, isinalin sa atin ngayon ang pahayag na ito sa pamamagitan ng tradisyon ng Simbahan. Nararanasan natin sa Simbahan ang kapangyarihan ng Muling-Nabuhay na Kristo sa pamamagitan na kaloob ng Espiritu Santo. Sa Simbahan, ang Katawan ni Kristo, nakakaharap ng Pilipinong Katoliko si Kristo: sa Salita ng Diyos sa Banal na Kasulatan; sa turo ng Simbahan; sa liturhikal, sakramental na pagpupuri at pagsamba sa Diyos; at sa gawaing paglilingkod sa isa't isa. Si Kristo ang personal na Tagapagligtas para sa mga Pilipinong Katoliko hindi bilang pribadong tao kundi bilang *mga kaanib ng isang sambayanan ng kaligtasan kung saan nakakatagpo natin si Jesus at nararanasan ang kanyang kapangyarihang mapagligtas. Hindi lama ng isang bagay na pribado o pansarili ang pananampalataya kundi isang pakikiisa sa pananampalatayang ito ay buhay na nagpapatuloy ng Simbahang mula sa mga apostol, gayundin sa pagiging kaisa ng lahat ng mga Katolikong sambayanan ngayon sa buong mundo.*

10月の会と催し

- 4日 (日) 年間第二十七主日
▼松田清四朗神父、平孝之神父霊名 (アシジの聖フランシスコ)
 - 5日 (月) 牧山田一神父叙階記念日 (一九六一年)
▼デルクス神父命日 (一九八〇年)
 - 6日 (火) フランシスコ祭
▼福崎英雄神父叙階記念日 (一九八九年)
 - 10日 (日) 年間第二十八主日
▼名瀬聖心教会聖信式
 - 11日 (月) アッシュヤー神父霊名 (マックス)
 - 12日 (月) 年間第二十九主日
▼世界宣教の日
 - 18日 (日) レンデンプートル会例会
 - 19日 (月) 奄美例会
 - 20日 (火) 奄美例会
 - 24日 (土) 大水如安神父命日 (一九九四年)
 - 25日 (日) 年間第三十主日
▼東研神父叙階記念日 (一九六四年)
 - 27日 (火) 大松正弘神父霊名 (聖ジェラルド)
 - 28日 (水) 聖シモン 聖ユダ使徒
 - 31日 (土) ミタマヤ神父命日 (一九八四年)
- 【司教の日程】1日大口明光学園理事会、11日名瀬聖心教会聖信式

参加者募集 郡山司教と行く屋久島シドゥチ祭

●日程 11月22・23日 ●費用 三万五千元 (高速船・専用車・宿泊一泊二食付・昼食二回付) ●募集人員 25人 (最少催行人員20人)
 ※申込・問合せ ヨセフ会巡礼担当・徳永善廣 (携帯〇九〇—三六六九—〇四二三) ☎〇九九—二〇六一七—二二二一

純心女子大付属保育園で開園式 地域の子育て支援の拠点に

九月十一日(金) 鹿兒島純心女子大学付属純心保育園(大串アヤ子園長)の落成・開園式が薩摩川内市隈之城の「純心こども森」であり、関係者七十人が出席した。



学校法人鹿兒島純心学園は、今年三月に閉校した川内純心女子高等学校の跡地に、この四月保育園を設置した。これは既設の純心幼稚園の運営経験を生かし、幼保一元的保育を目指してのこと。敷地内整備のためこの時期の開園式典となったが、幼稚園、子育て支援センターと一体となった保育施設は「純心こども森」の名称そのままに子どもたちの楽園となるほか、純心女子大学こども学科の学生たちの実習の場にもなる。

司教執務室便り

ロザリオの力

数年前のことになりますが、若い人たちがロザリオを首にかけているのを見て驚いたことがあります。プロテスタントの牧師さんがロザリオの詳しい解説を自分のホームページに載せていることにも驚きましたが、愛用している若者から質問されてそれに答えているというこのようでした。マリア様への見解の違いからプロテスタント用のロザリオの唱え方の試案まで載せていて思わず笑ってしまいました。見ず知らずの牧師さんに親しみを感じました。

ところで、ロザリオが現在の形をとったのは十五世紀だといわれますが、その起源といわれるエピソードには興味を感じました。ドミニコ会といえど説教修道会として有名ですが、ドミニコは十三世紀はじめ頃に活躍した聖人です。当時猛威を振るったアルビ派という異端の根絶

催し物のお知らせ

- レジオ・マリエ鹿コ ミチウム主催「黙想会」(愛の実践) 10月7日(水) 10時～12時 ザビエル教会 指導: 山口重義神父(阿久根教会)
- 1日マリアポリ 10月18日(日) 10時～17時 教区本部会議室 無料(必要の方は090-5026-5921 直まで)
- ホルスティック療法による癒しと祈りの集い 10月19日(月) 10時 ザビエル教会ホール 500円
- 正食(マクロビオテック)料理教室 10月27日(火) 10時～15時 ザビエル教会 2,000円 講師: 角屋敷まりこさん 申込は植村まで TEL 0995-43-3796 uemuras@po.mct.ne.jp

改装工事始まる 阿久根修道院

聖心の布教姉妹会から教区に移譲の申し入れのある阿久根修道院の改装工事が九月十七日(木)から始まった。同修道院は昨年、聖園老人ホームの経営が社会福祉法人「善き牧者会」(竹山昭理事長)に移管した折、

この度の工事によってこれまでの修道院一階に聖堂と集会室と事務所、二階はベトナムから招聘したプロビデンス修道会のシスター三人が住む修道院となる。これまで阿久根教会は独自の聖堂を持つことなく、四十六年もの間「聖園老人ホーム」の多目的ホールを聖堂として借りてきた経緯があり、工事が終われば長年の夢の実現となる。尚、プロビデンス修道会の三人のシスターは小教区の手伝いや老人ホームで働く予定である。

マリア山荘黙想会

マリア山荘黙想会(後期)が左記の日程で開かれる。今回のテーマは「イエスの友となるために」で、参加しやすいように日帰り黙想と一泊での黙想が用

短信

▼ホルスティック療法黙想会 九月十四日(月) ザビエル教会で坂本進神父(種子島教会)による黙想会があり、約四十人が参加した。

▼御言葉と祈りの集い 九月十六日と十七日、裏辻洋二神父(イエズス会)による黙想会が教区本部であり、約二十人が参加した。

日帰り黙想会	
第一回	わたしにつながっていないかい ヨハネ一五・四 十月二十二日・木 十時半から十五時
第二回	わたしはだれでも わたしのと ヨハネ七・三七 十一月二十六日・木 十時半から十五時
一泊黙想会	
第一回	わたしにつながっていないかい ヨハネ一五・四 十月十七日・土 十六時半から 十八日・日 十時半
第二回	渴いている人はだれでも わたしのと ヨハネ七・三七 十一月十四日・土 十六時半から 十五日・日 十時半

「私のそれでも体験」 喜びを湧き立たせて下さった聖体拝領②

阿久根教会 岡本ひろ子

「ご聖体頂いてしまったね」「ウン」「どうする? 教会に帰らないといけないね」などの会話があった気がします。イエズスさまと神父様に対して申し訳ない気持ち。でも切なさの中に何か温かい真綿にくるまれたような嬉し、不思議な、不思議な気持ちでした。あの時の山口神父様の相対的な覚悟と決心を考えたが、関係者に電話で神父様に聞いたのです。ご聖体頂いていいですか、私、これからどうすればいいのでしょうか?」

「イエズスさまの食卓に招いて頂いてよかったですね。教会の扉を叩きなさい。そして一歩、中に入りなさい。大丈夫ですよ。私が聖霊にお願いしていますよ。聖霊にお任せして、何も心配しないで前に進みなさい。あわてないで、ゆっくりな」

この言葉に私の体は動き出しました。こうして私の信仰生活が再スタートしたのです。一枚のご聖体により新たに生まれたのです。日曜日に限らず、平日も朝夕にかかわらず、ミサの行われている教会を探し、「毎日、ご聖体を頂きたい」との心から、大阪、神戸、明石の教会、修道院のミサに毎日あずかっています。でもお祈り文も昔とは変わり、典礼もまったく変わっていて、聖歌も知らない曲ばかりです。知った人もなくまるで浦島太郎です。何度も「こんなんじゃない!」と自我との闘いがありました。でも「自分の考えを捨てて、素直な心で幼子のように従いなさい」とのみことばを心に刻み、マリアさまにお取り次ぎを祈りました。「もうごぼれ落ちないようにお守り下さい」と。

それから私なりに頂いたお恵みの大きさ、そして父のものと帰ってきたあの放蕩息子のようにあった時も、いいえあの時こそ、大きな恵みで満たされたことなど感じる。ことができました。「あがないのいけにえ、永遠の命の糧」愛に生かされた私の喜び、これは神の愛のプレゼントです。ご聖体を頂くとき「万歳、万歳」と叫びたい気持ちです。そして今の私は、あの一枚のご聖体を頂いた阿久根の老人ホームで働かせて頂き、イエズスさまと再会をし、回心に至ったこのご聖堂で毎日ミサの準備などをさせて頂いています。

人生の価値観を百八十度転換し、天の宝を求めて、人に仕えるというキリスト様のお働きを継承させて頂きたい気持ちに燃えました。「疲れた者、重荷を負う者は誰でも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われたこんなにやさしい、こんなに慈悲深い神様を怖い神様にしてきた自分自身を悔やみ、私に下さったこの大きな愛の心を周りの人に告げ知らせ、行いをもって信じることを、望むこと、愛することの素晴らしさを私なりにイエズスさまと共に伝えたいと思います。

私たち罪人のため、惜しまずすべてを与え尽くされたイエズスさまに倣って:



神学生が夏期合宿

教区大神学生 久保裕己

八月二十四、二十五日の二日間、小神学生五人、大神学生一人による合同合宿が行われました。交流を中心にしながらも鹿兒島市内の幾つかの教会訪問、そして夏休みの宿題の総仕上げといったスケジュールとなりました。公式に行われたのは今回が初めてでしたが、非常に実り豊かなものとなったと感じます。



元気いっぱいの神学生たち

成され、思春期を送り、そして大人の階段を登って行きます。多くの様々なプレッシャーの中で最も必要とされるのは同じ立場にある仲間であり、先輩や後輩たちの存在です。それは自分の不安定な召命を勇気づけ、また互いに切磋琢磨する良い機会を与えるものとなります。そのような意味で今回は、鹿兒島の神学生たちに縦と横の繋がりを作することを第一の目的と考えました。実際に小

神学生たちにとっても、互いに生き生きとしたかわりを作ることができたと思います。私自身にとっても小神学生たちと知り合い、また自分の歩みを確かなものとする良い機会となりました。意外な一面を持つ神学生や、見た目からは想像できないほど自分の召命を深く考えていたり、実に様々でした。神

みことばシリーズ⑤

触れるとは「聞くこと」iv

教区助祭 四條 淳也

今から九年前の二〇〇〇年十月十日、S神父さんに「教会の祈り」を一冊に唱えましょう」と言われて、一冊の新しい「教会の祈り」の本を頂いた。「神父さん方が唱えている『聖務日課』ですか」と私が聞いたので、神父さんは「以前は聖職者だけに義務付けられた祈りでしたが、現在は信徒にも勧められています」という説明をされたので、一緒に唱えることにしました。

本で、どのように唱えてよいか分からなかったが、週に一回夕方に聖堂で神父さんの指導で、一緒に「晩の祈り」を唱え始めた。最初は数人だけだったが、その内に人数が増えて行った。年間を通して、すべて唱える箇所が決まっておおり、指定の箇所を読むことになった。祈りは三つの詩編が主体で、その間に短い答唱などが入っていた。唱え方も少し慣れた頃、神父さんに一緒に那須の修道院へ行きましよう誘わ

れたので同行した。修道院に着き、修道院長に挨拶を済ませた後、夕食前にシスター達と柵を隔てて聖堂に座り「晩の祈り」を始めた。詩編唱和にはメロディーが付いており、天使のような歌声にしばし我を忘れて聞いていた。

旧約時代のダビデも、琴を弾きながらこのように歌ったのだろうと想像した。終身助祭叙階後は、T神父さんに「教会の祈り」の細かな唱え方を教わり、毎日祈るのが本当に習慣になり、日課となつていく。

それでは、一日に何度も祈る習慣については、旧約聖書ではどのように語っているのだろうか、いくつか聞いてみよう。ダニエル6・11には、「ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつもものごとくに二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた一日に三度祈りを捧げた」とある。また詩編55・18には「夕べも朝も、そして昼も、わたしは悩んで呻く。神はわたしの声を聞いてくださる」夕、朝、昼と日に三度祈っていたようである。

新約聖書にも使徒言行録3・1には「ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った」というように一日の中で時間を決めて祈っていた様子が伺える。このような習慣が「聖務日課」として聖職者の間で祈りの習慣となり、現代に至つて「教会の祈り」となつていくのである。「教会の祈り」の序文には「日本語では『教会の祈り』と呼ぶことによつて、司祭・修道者など特定の人々のためのものではなく、神の民みんなの祈りであることを表すことになつた」

文

俳句

芸

短歌

今朝の秋不安検査や終りけり
修院の坂道ころろ毬栗や
石頭何を愛だと言うのかな
鹿兒島 春山マリ子
純心学園 川上 和
朝明けや彦山描く螢茶屋
鹿兒島 徳永ノブ子
追憶をたどり空しや終戦忌
鈴虫の鳴きて闇夜の澄みにけり
ゆらいあい 松村精子
炎天のエプロンかけのマリア笑み

霧島市 市来 房枝
教区報限無く読みて心足らひ朝の散歩に
吾は出てゆく
頑なにゆずれぬ想いにとられて独り御
前にたたずむころ
鹿兒島 春山マリ子
生れ出て死ぬまで一人この命夢も希望も
我が胸にあり
鹿兒島 前田 儀子
うたた寝の夢の領域に手を振れる亡き夫
の後姿はうすみどり色
一齣のドラマのごとくかなかなの声につ
つまれクッキーを焼く

マリア山荘で九州青年キャンプ開催

八月二十九日(土)と三十日(日)、マリア山荘に九州各教区から青年が集まり交流を深め合った。今回のテーマは「DE☆JAM」。「記憶に残る出会いを」。参加者は二十九人で福岡、大分、長崎、鹿兒島教区の青年たち。



二十九日は午後から始まりレクリエーションと分かち合い、夜はバーベキューと交流会。三十日は近くの聖血礼拝会訪問と簡単な作業、そして最後はミサで締めくくった。

多くの青年がテーマの通りに記憶に残る出会いを体験し、九州地区全体の青年の盛り上がりや心を誓い合うものとなった。青年たちにとって同じ信仰を生きる人たちとの出会いは何よりも大切であることを再認識させてくれるものだった。

そして聖血礼拝会を訪問し、若い修練者・志願者たちとの出会いを通して自分たちそれぞれの召命の種に何かを感じたようだった。願わくば、この青年たちの中から将来の修道者や司祭たちが出てくれることを願いながら……

信仰と漢字(十)

純心学園 司祭 岡 俊郎

「教・孝・命と漢字によって、信仰の内容はよく表されている」と自分に言い聞かせながら9回続けてきました。その時点で、この真実を生活の中で生かすこと、即ち人間の生き様が信仰そのものではないか、と思うようになりました。

「うつだと言われ、内観を勧められました」と40代の男の方が来られました。早速、内観の説明を始めました。

まず、内とは魂のことでしょう。天から授かった命の働きが自分であり、具体的には、その命に両親がからだを添えて生んで育ててくださった。體(からだ)は元々(もともと)欲で動くだけでしたが、命の働きが中心になると、その命の働きにあずかるようになる。具体的に全身を包みこんで支える筋肉の隅々にまで、張り巡らされている血管をスムーズに流れ巡る。元気即ち命の働きであり、毎日やる気が常に衰えません。